27PE-pm059

日向薬（くすり）事始め（その5）－日向出身の適塾生－

○山本　郁男[1], 宇佐見　則行[1], 井本　真澄[1], 岸　信行[2]（[1]九州保福大薬, [2]延岡北小路調剤薬局）

【目的】前報（その 4）[1)] において、演者らは日向（延岡）、内藤藩の藩医・侍医を務めた白瀬道順（1756-1846）ならびに永年（1775-1803）と彼らと関係のある人々の生い立ちと業績を詳細に報告した。本報では、日向出身の医家の経歴（主に学歴）を主とするも九州全域の医家、本草学者、儒者などを系統的に調査した。九州における江戸中期までの医学（薬を含む）の修得は大きく分けて長崎、そして関西（京都、大阪、岡山）への遊学である。その前に殆どは大分（日田）の広瀬淡窓の開く咸宜園という塾に幼少の頃より入り、儒学および漢学を修得している。第 1 報 [2)] で述べた秋月橘門（1809-1881）は岡山の難波抱節（難波塾）にて内科学を修得した。また、第 3 報 [3)] の延岡における医祖として知られる渡邉正庵（1631-1699）は京都の伊藤仁斎、東涯に学び、同じく第 4 報の岩切芳哲（1730-1806）は長崎において楢橋栄哲の下でオランダ外科医術を学んでいる。楢橋栄哲は有名な長崎の医師、楢林鎮山の孫にあたる。本報では大阪の緒方洪庵の「適塾」に学んだ、この日向（宮崎県）の地より 6 人の若者、すなわち岩切孝哲男久吉、竹林恒夫、木脇文節、杉尾高耿、木脇道隆、橋口魚蔵の名前がわかった。この時代、この地より医学を志した人々の分布を資料は少ないが現在可能な限り調査したので「適塾」出身者を中心にここに報告する。

1）日本薬学会 127 年会, 富山, 要旨集 4　p.210 (2007)
2）九州保健福祉大学研究紀要 6　p.277-285 (2005)
3）九州保健福祉大学研究紀要 8　p.187－192 (2007)